

## 子馬の育て方

岡田みつ

花の香芳ばしい初夏の、土曜日の午後には伯父と甥は樹蔭を慕つて廣庭の「はりえんじ」の下に出て居た。馬を仕込むのが商賣の伯父は今朝數哩先の馬匹共進會へ行つて來たのだが、今しがた美味く晝食を了り、何とも言へぬよい気分になつて、常よりも一層にこやかな顔をして、馬の廣告の一ぱい出てゐる新聞を讀んで居た。甥は傍の芝原に寝そべつて居た。今轉寢から目を覺まして芝地の上を眠さうに轉げながら、新聞の明くの待つて居るのであつた。

すると、庭の門から二人の方を指して、此のあたりの牧師をして居る隣りの人が入つて來た。氣の暢びのびした此家の主人と話が合ふので、土曜の午後などはよく訪ねて來るのであつた。門の開く音をきいて、伯父は新聞から目を離し「椅子を持つて御いで。」と甥に懇ろな調子で言つた。やがて花盛りの「はりえんじ」の樹の下で田園的集會が始まつた。大人二人は對話し少年は自分の番になつたとばかりに、芝生の上に長くなつて新聞を讀み耽つた。

牧師は自分の苦勞談を持ち出した。不思議な事に、人といふものは、あまり善良過ぎぬ相手を見付けて、打明け話をするもので、此馬の飼育者も、他人の苦勞に同情が出來ない程度外れに善良でなかつた譯である。牧師の苦勞といふのは、成人しかけてゐるその悴達に手摺つて居るといふ一句に纏つてしまふのであつた。幼時から父親は、爲になる事を教へ込まうとしたのに、子供達は爲にならぬ事をしやう／＼と心掛け

て居るらしく、成長するにつれて我儘は募るばかりで、父親は落膽しきつて居るのであつた。朝から晩まで爲てはならぬ、爲てはならぬと教へるのに悴達は始終それをしてゐると父は話した。

樹の下には、夏の日の穩かな物音が聞こえて來て、牧師の耳には「自然」といふものがいかにも幸福で氣樂さうに見えた。馬飼ふ人は、牧師が話し止むと、心靜かに笑つて、さて優しく恭しく、

「わしは子馬をそんな風には育てない。」といつた。

「わしの悴は子馬でもなし驢でもない。」と牧師は笑つた。

「子馬でないのは、わしも知つて居る。が、此二種の動物を仕込み方に差異があるだらうかなあ」と言つて馬飼ふ人は暫時語を途切らせてから

「君は或仕込み方を行つて見てやり損つたと言ひなさる。當然だぞわしは思ふ。人間でも獸でも、爲てならぬ事に心を用ひるのが、生涯の仕事だといふやうに仕込めば、それは巧く行かぬに定まつて居る。君は息

子達を始終戒めてゐると言ふ。それでは禁じた事を子供の心の中に描き出させる事になつて、世の中を羈絆や馬勒のやうなものと思はせてしまふ、わしの推量では、君は人間の悪い性質を書き並べて、それを子供に暗記せよといつてゐるやうだ。そして用心せよ／＼と教へてゐるのだらう。え？」

「その通りだ。」

芝の上に横になつて居た少年は、新聞を止めて傾聴し初めた。大人二人は、その注意を歡び迎へた。牧師は會衆がないと話を爲にく／＼思ふ癖があり、伯父は甥にそれとはなしに、暗示して置きたいと思ふ事を、話す機會が出來たのを喜んでゐるらしかつた。



「宜しいか。そこがわしの仕込み方と君の仕込み方と違ふところだ。」と馬飼ふ人は語を繼いで「わしは子馬共を集めて、荒馬の悪癖を數へ上げ、よく記憶して居てその眞似をせぬやうになごといひ聞かせはせぬ。……そんな眞似が出来ても爲ない。君は、大昔に人間の犯した悪事を子供達に教へてゐる譯だが、わしは馬をそんな風に仕込まうとは思はぬ。先祖傳來の記憶は皆忘れさせ、先祖傳來の能力を纏めて今の用に充てさせやうとするのだ。まあ、聴きなさい。馬の齒は昔、敵を咬むための武器だったのを、わしは、馬に、齒は物を食べるのに使ふものだと思はせるやうにする。馬の蹄は敵を打つ爲のもので、前足で立つて後足で蹴るか、後足で立つて前足で地を打つかするのだ。また、馬は臆病者で、生れてから死ぬまで押通し臆病だが、あれが臆病でなかつたら死に絶えてしまつたらうし、足の早い御蔭でまあ生き残つて居られたのさ。敵に勝つ事が出来なければ逃げるより他はないだろう。それで馬を安全に守護してやつたものは恐怖の念で、馬の一番貴い性質だ。わしは現在、馬に、足も脛も走る力も皆競馬場で勝つためのものと教へ込むやうにしてゐる。敵なんか世の中に存在するものとも思はせない。人間も馬の先祖代々からの敵でなくて、馬の伴侶……主人であると教へる。隠れてゐるその悪癖なんか一つでも暗示をしない。馬が何をしても禁じた事がない。爲てはならぬ事を教へないで爲べき事だけを教へる。だから、わしには良馬が出来て、君には……いや失敬〜。」

牧師は「わしは世界始まつて以來、良いと定まつて居る昔ながらの教育法……先輩が後輩に向つて、爲てならぬ事を教へるといふ方法を固く守る。」と一息に述べた。

すると馬飼ふ人は、いひ得ぬ快活さで

「だつて君、人は生き物に對つてする勿れと教へる事は出来ないぢやないか。せよと教へるだけさ。萬物の神があるとするれば、その神は爲すの神だ。無が教へられぬやうに勿れだつて教へられない。君の息子に「無」を教へやうとしてみなさい。此世では、勿れを教へた例もないし、此先教へる事もない。勿れは空で無だもの。爲やうと志し、希望する事しか教へられるものでない。それが根本だもの。君は牝牛が牛乳のバケツを蹴返さぬやうにと、わしがその後足を縛つて置くと思ひなさい。否、わしは他の方法を取つて、牛が蹴たくなつても……それは牛の自由だが……その自由を捨て、足を地に着けて置きたくなるやうに教へるのさ。結局は、そこなんだ。」

二人は誠意で機嫌よく話してゐた。併し少年は伯父の言のみを漏らさじと聞いた。伯父は、「君、記憶して居るかね。二人が、向ひの學校に居た頃、一度教師の奴がかく〜の時間には水を飲ませぬと言つた事があつたらう。すると、それまでは誰も、其時間に水を飲みはしなかつたのに、その命令が出た翌日は、級中が水が飲みたくなつて、飲まして呉れと言ひ出して、とう〜飲んだつて。あれは、正義に渴したんだ……、誰だつて渴した時に水を飲む権利がある……いや渴して居なくても飲む権利があると思ふから、その権利を擁護したさに命令に背いたのだ。権力よりも強いものは人の権利だから、爲てならぬといはれると、人情として、其禁止が自分の自由を侵害しはせぬかと吟味をするので、子供が命令に背くのも、持つて生れた一の権利なのかもしれないか。」此處まで言つて、伯父は不意に甥の方を向いて、

「御前、聞いて居て詰らないか。」と言ふと、甥は話の半分は詰らぬと當て付けるやうに言ひ放つて、何れの



半分が氣に入らぬのかを自然に知れるやうにした。

伯父は、客人への此無禮を氣が付かず、なほも愛想よく話を續けて、

「わしには、結局かう思はれるのだ。話が、馬から人間の事に移つたが、ごどのつまり、かう思はれるのだ。失敗と違犯との差異といふ事になるのだ。爲よと命じてその最劣等の結果は失敗であるが、爲てはならぬといつてその最悪の結果は違犯になる。人は部分的失敗を力に生きて行くもので、失敗が努力の端緒になり、努力を誘引する。行つて見て、仕損ふ。一層の決意と、力と、經驗とをもつて失敗を拭ひ去つて、先へ乗り越す。後になつて過去を見返つて、その仕損じを笑ひ、且懐かしく思ふ。失敗が、過去の自分と、今の自分を測る尺度になるのだから。……失敗は向上の途なのだ。

それが違犯となると、全く反對で。およそ違犯と名のつくものに發育成長を意味するものはない。一つの違犯はそれだけの死で、違犯から勝利を無理にでも得る事は出来ぬ……違犯といふものが最後の敗北であるから。そして敗北したものは、何かといへば人の意志なのである。違犯ごとにそれだけつづつ意志は殺されるので、違犯は、人を弱め、失望させ、屈辱させ、苦悶させ、毒害する。……違犯の途は下へ向いてついでゐる。」

彼は立ち上つた。同時に客も。彼はまた言つた。

「厩へ来たまへ。君に逸物を御目に懸ける。その馬はいやな暗示を受けた事は一度もないんで、この農場を樂園だと思つて居るよ。わしが教へた五つの重なる事は、意志を強くする事、走る力を増すこと、忍耐力を養ふ事、自尊心を持つこと、愛情を發達させる事とで、……實に駿馬だ……」

大正五年十二月廿八日印刷  
大正六年 一月二日發行

(非賣品)

發行所 東京市女子高等師範學校内  
文科學術談話會

編輯兼發行人 東京市赤坂區新坂町六十八番地八號  
千葉安良

印刷者 東京市神田區旅籠町二丁目十二番地  
畑桂之助

印刷所 前同所  
廣業館

(電話下谷五五七番)